

きをしたが、あの場合、男の代議士が、静かに「すみませんが帽子をとつてくれませんか」と云つたら、山口代議士も「とらない！」とは云わなかつただろう。問題は「言葉」に発しているのである。

言葉をたのしみ、言葉のリズムに興味を持たせることも日常生活を明るくすることである。

### 三、聴き方

日本人は話を最後まで聞かない悪い、せがある。特に大勢の場合、音楽会や講演会にしても、途中から入つたり、私語したり、途中で立つたり、全く公衆道徳（集会のエチケット）を無視する。

幼児期から見たり聴いたりする正しい態度を指導してやらなければならぬ。

### 四、其の他

ごっこ遊びは社会の模放遊びであるからこの遊びを通して、社会生活をする話しの仕方や挨拶のしかたを暗示するものである。

## 齒列の不正をおこす種々なる不良習へきについて

劇遊びは劇ではない。人に見せるための幼児劇ではない。童話を聞いて、その童話に興味を持ち、それを芝居ごっこをして見た衝動にかられて、劇的な表現をするのが劇あそびである。だから、劇あそびには幕を用いたり、背景を作つたり、扮装やメイクアップをしたりしないのが原則である。

### 五

要するに、保育に於ける言語教育は、特別な時間を設けたり、カリキュラムに組み入れたりするものではない。

幼児の生活として、あらゆる機会に、随時随所に於てあらゆる形で、より多く取り扱われなければならない。

唱歌や遊戯は、毎日与えられている、鳥の鳴かない日はあつても遊戯をやらぬ日はないのが、今日の幼稚園保育所である。しかるに、生活に直結している言葉については案外無関心である。今後の保育者は言語の教育に最大の努力を払う可きである。

## (1) 緒言

色々なくせが子供の齒列をみだす原因になる事は、齒學の分野では古くから諸先輩によつて論及されて居る。我が國に於ては高橋①、渡本②氏等の諸業績があるが米國では Johnson, Jensen, Mack 等がそれ々の観点から研究発表している。又 Levy は大による指しやぶりの興味ある実験的研究をしている。その他不良習癖の問題は心理学方面から種々論議され、下田③、戸川④氏等は「指しぶり」「爪かみ」等は兒童の神經質な徴候であると記述している。南⑤氏はその著「異常心理学」で「指しやぶり」「爪かみ」は「置き換え」や退行の機制的表現であると解釈している。オナニーと同じく小兒が身体の一部に余り關心をもち指しやぶりのような事をやつて自己満足する習慣ををつけることは、自閉的な社会性のない子供つばい傾向を續けてゆくことを意味するので、パースナリティーの發展の爲には、是非この習慣は是正すべきだと云つて居る。尚又ロバンはこれらの習癖を遺伝的變質の中に入れ、これらに合併して精神的にも肉体的にもいろいろな變質徴候を認めている点は興味がある。小兒科領域に於て最近若波氏は規則授乳児に「指しやぶり」の習癖が多く、その結果齒列不正異状性格を造ると云つて居る。私共も予防矯正の立場から、この研究の必要性を痛感し、且又これらの習癖を心理異状行動の一形態とみなしてそれらの成立に何か兒童の生活環境が密接に關与するのではないかと思はれるので、生活環境差を多分に認められる幼稚園兒童二千四百三二名及保育園兒童三一八名につき調査した結果、いさゝか所見を得たので發表せんとするも

のである。

## (2) 検査方法及び検査成績

### (A) 検査方法

通法に従ひ細密な口腔診査をし、一応不正咬合があると思はれた兒童をより分け、その中で次の三点に該当するものをのみ不良習癖による不正咬合所有者としてえらび出した。

即ち、(1)口呼吸をいとなまぬもの

(2)不良習癖以外に不正を起す様な原因の認められぬもの

(3)保母友達等誰も認めるような習癖を有するもの

尚乳齒列に關しては正常咬合の定義が色々まち／＼のため、私共が不正とみなした者は全部比較的顯著なるもののみである。

尚私共は五五〇名中不良習癖によつて起つたとおぼしき四九名の中二八名につき質問法により次の諸点に關し環境調査を行つた

即ち (a) 家庭の經濟状態

(b) 授乳時の状態 (人工、混合、母乳、規則授乳不規則授乳等)

(c) 兒童の性格肉体的欠陥について

(d) 其他

尚私共がこの度行つた方法では乳齒列の何処が不良習癖により不正咬合を起して居るか云うことにはある程度明瞭になるが、指しやぶり等の不良習癖を有する者の中どれ丈が不正咬合を起すかと云う点ならびに正常咬合をいとなむ子供たちの内に、どれ丈の不良習癖を有するものがあるかという点が、不明であるため、それらの点につ

いては他日発表するつもりである。

(B) 検査成績

(1) 乳歯列に発生する不正咬合の頻度に就いて前述せるように比較的明瞭なる不正咬合のみをえらんだ。即ち五千五百五〇名中不正咬合を有するものは二百四名であつたつまり 4.8% に不正咬合を發見したその内訳をすると表1のとおりである。

表1 歯列の不正咬合の頻度

(イ) 反対咬合	114
(ロ) 上顎前突	16
(ハ) 開咬	39
(ニ) 其の他	35
(亂挑過著 捻転交叉等)	
合計	204

(2) 不良習癖によると思はれる不正咬合の頻度について、私共は前述せる方法により二百四名中四九名の不良習癖によるとおぼしき児童を發見したがこれは二百四名の24%にあたる。即ち全調査児童の 0.6% に該当する訳である。尙これら不正咬合を種類別に分類すると表3の通りである。

表3 不良習癖による不正咬合の種類と頻度

(イ) 前突	1
(ロ) 開咬	33
(ハ) 前突開咬	3
(ニ) 反対咬合開咬	1
(ホ) 亂挑	1
合計	49

又習癖の種類を分類すると、表4の通り

表4 不良習癖の種類

(イ) 指しやぶり	24
(ロ) 乳首	4
(ハ) 吸唇	2
(ニ) 齧物を噛む	3
(ホ) 弄舌	13
(ヘ) 開咬	1
(ト) 爪咬み	1
(チ) 爪咬み	1
指しやぶり	
弄舌	
合計	49

尙これを環境別にみると表5の通り

表5 幼稚園と保育園

幼稚園	14名	♀10 ♂4
保育園	25名	♀13 ♂12
計		♀23 ♂16

(幼稚園保育園は充分に環境差を認め得る)

つまり幼稚園では不良習癖からくる不正咬合は 0.6% 又保育園では 0.8% で保育園に多いのである。つまり一応生活環境の悪いと思はれる保育園に多い事は興味がある。又保育園幼稚園共に女に多い。

(C) 環境調査

尙私共は前述せるように、これら四九名中廿八名の児童につき質問法による環境調査を行った。廿八名の中一四名が幼稚園(♀3)保育園が一四名(♂5)である。尙授乳に関しては、母乳のみで充分にた

りた者を母乳としそれ以外の者は全部便宜上人工とした。

以上の結果からして授乳状態についてみると人工栄養児が一九名で母乳が八名又両親揃っているものが廿二名で六名は両親に欠陥のあるもの。尚性格智能肉体に欠陥のあるものが廿八名中廿二名の多数にあつた。

## 総括と考察

(一) 五千五百五〇名(六才未満)の児童で不正咬合を有するもの、頻度は3.7%

(二) 不良習癖による乳歯不正咬合は全不正咬合の24%で約1/4ある。これは全調査人員五千五百五〇人の0.9%にあたる。Johnsonは九百八九名の調査で17%の発生率があると云つている。

尙又 Levy は一二例の調査の結果指しやぶりの大多数に咬合の異状を認めなかつたと云つている。

(三) 尙環境別にみると一応環境のよい幼稚園では0.6%保育園では0.8%で幼稚園の方が0.2%丈発生率が少い。

(四) 不正咬合を起す様な不良習癖の中で最も顕著な変化を与えるものは乳首の常用の様である。その口蓋形態はV字形である。この点 Levy が指しやぶりの治療法としてゴム乳首、おしやぶりなどを与えればよいと云つている点は歯科学的には大いに考えなくてはならない。何人工栄養児に多い、廿八名中一九名が人工栄養である68% (但混合栄養も人工の中に入れた)

(五) 両親共にもないもの、片親丈ないものは廿八名中六名に21% (但性格、智能及肉体に欠陥のあるもの廿八名中廿二名78%)

以上の結果からして乳歯列の不正咬合の原因としての不良習癖と云うものが相当高率である事は注目に価する。尙以上の結論よりして種々なる不良習癖の背後には何か環境上の欠陥があると云う事を考えなければならぬと思う。斯うした意味からこれらの結果起る不正咬合に対しては精神衛生的観点よりみても矯生治療上相当な注意を要するではないかと考え、尙斯うした云はば心理的原因がその不正咬合の發生の動機として考えられる場合これらの不正咬合は一種のサイコソーマティックデシーズであると云う見方も出来るのであるまいか?。以上の様な訳で子供達の癖は是非幼稚園保育園などで矯正して戴きたいと思ひます。以上大変ざつぱくな研究でありますが皆様の日常保育上いくらかでも御参考になれば幸いです。

## 文 獻

- 1) // 指指吸引癖は害である // 齒科展望 8 卷 15 号
- 2) 高橋新次郎著、// 矯正齒科学、理論と實際 //
- 3) 米國児童局著、下島連訳 // あなたのお子さん (1才から6才まで) //
- 4) シルベロバン著、吉倉範訳、異常児 (P404)
- 5) 南博、井村恒郎、加藤正明共著、異常心理学 (臨床心理学叢書 I) (P279)
- 6) 齋藤久岩垣写、高橋新次郎共著、予防矯正問題 (公衆衛生齒科叢書)
- 7) 榎恵、// 弄舌癖とある種の不正咬合との關係に就て // 口腔會誌 12 卷 3 号

- 8) 高橋新次郎、小原博司、〃ゴム乳首の乳歯穿に及ぼす影響に  
ついて〃口腔病学会誌9巻3号10月
- 10) 詫摩武人、松見富士夫〃小児科領域に於ける内外診療界の展  
望〃医事新報一四四七号

## 保育者の精神衛生(一)

— 保育者の悩みについての調査 —

- 11) 〃小児歯科における指吸引癖に対する歯科医と心理学との  
協力的な見解〃齒界展望9巻1号
- 12) 児童研究法(児童心理叢書1) (P.207) 金子書房
- 13) 木田文夫、〃体質と神経質〃 (P.83及P.403) 金子書房

頌栄短期大学 西 本 脩

### 〇目的及び問題

近頃児童の精神衛生の問題と関連して教師の精神衛生ないし精神的健康と云うことが、教育上の重要な問題として盛に論議されている。これらは主として小学校以上の学校教育について論ぜられているようであるが、幼児教育の場合について考えて見ると、この「教師の精神衛生」の問題がより重要な意義を持つていっているように思われる。

幼児教育に於ては保育者と幼児との関係ほど重要なものはない。幼児のためにより環境を与え、最も望ましい保育を行うためには

色々大切な条件が挙げられるが、それらの条件の中で、最も重要なものは、よい保育者を得ることである。たとえ、その幼稚園保育所がさほどよい自然的環境に恵まれていなくても、或はその設備が充分に整っていないなくても、よい保育者を得ることが出来るならば、これらの欠点を補つて余りあるほど、決定的な影響を与えるものである。

従つてよい保育を行うためには、よい保育者を得ることが、何よりも先ず必要である。よい保育者であるためには、身体的に健康であることが望まれる。それと共に、否それにも増して必要なことは精神的に健康であることである。